

## 図書館報

ソフォス

σοφός

No. 44 March 2013

発行 沖縄キリスト教学院図書館  
〒903-0207  
沖縄県中頭郡西原町字翁長777番地  
TEL : (098) 946-1236 FAX : (098) 946-1237  
URL : <http://www.cejc.ac.jp/library/lib.html/>  
E-mail : [toshokan@cejc.ac.jp](mailto:toshokan@cejc.ac.jp)



## Library Farewell

沖縄キリスト教学院大学人文学部  
英語コミュニケーション学科

教授 Randolph H. Thrasher

For as long as I can remember, I have always loved to read. Although my parents were not highly educated, our house was full of books. My great-grandfather had been a Christian minister and we had his books and, when my father's friend learned I wanted to become an engineer, he gave me some books in that field. So from an early age, I read very widely. In high school my nickname was bookworm. It was not very complementary. I was just the guy with my nose always in a book.

When I came to Okinawa in 1959 the boat stopped first in Yokohama and when I took the train to Tokyo I was overjoyed to see that the Japanese loved to read too. It seemed that everyone on the train had a book. Even those who were standing were holding on to the strap with one hand and holding a book in the other.

The bus riders in Okinawa were not such avid readers but my students in Shuri loved to read. They didn't have a lot of money to buy books so they would often stand in the bookstore reading until the manager asked them to leave.

I'm afraid that students today are different. If you see them reading it is most likely a manga or a text message on their cellphone. I think this is very sad because they are missing the opportunity to join the wonderful world of books. Television and the internet offer a chance to explore new worlds but the widest world of all is that of books. It is my hope that all the students will develop a taste for reading so they can spend their lives exploring new worlds that are found between the covers of books.

## 記憶している限り

記憶している限り、私はいつでも読むことが好きでした。両親はたいして高い教育を受けた方ではありませんが、我が家は相当量の本がありました。曾祖父が牧師だったので、彼の蔵書が多かったし、私はエンジニアに興味があり、父の友人からその分野の本を貰いました。といった次第で、幼少時から、かなり本をよんでいました。高校時代の私のニックネームは、「本の虫 (bookworm)」です。これは決してほめ言葉ではありません。つまり、いつも、本に鼻を突っ込んでいる、さえないやつ、ということです。

1959年はじめて沖縄にやってきたとき、横浜に寄港し、電車で東京に行きました。その時、この国の人々はなんと読書好きだろう、と嬉しくなりました、なぜなら、電車に乗っている人すべてが(と私の目には映った)本を読んでいたからです。吊革につかまっている人までが片手は本をもって読んでいたのです。

沖縄のバスの乗客はそれほど熱心に読書をしてはいませんが、首里の私の学生はよく読んでいました。彼らの多くが本を十分に買えるほど豊かでなかったため、本屋に追い出されるまで、もっぱら立ち読みをしていたようです。

現代の学生は違います。漫画、コミックや、携帯電話の通信文は熱心に読んでいますが・・・

私はそれを非常に残念に思います。なぜなら、それは深く、広い、本の世界をミスしてしまうからです。テレビや、インターネットも、新しい情報を提供していますが、本の深淵な世界はそれと比べることはできません。私の願いは、学生の一人ひとりが、表、裏表紙の間に世界を探求し、喜びを見出す生涯をおくるように、ということです。



## 「日本プロテスタント宣教150周年」 をめぐる諸問題

沖縄キリスト教学院理事長

神山 繁 實

「日本プロテスタント宣教150周年」に関する問題を考えてみたい。2009年に「日本プロテスタント宣教150周年記念」の年として盛大に祝う準備が何年も前から進められていた。この「150年祭」という節目の年は、どのようにして決められたのか。この点で沖縄と日本との間に大きな理解の隔たりがある。沖縄では、この問題は、ベッテルハイムをどのように評価するかに係っており、彼をめぐる評価の手がかりを何処に求めるかによって、大きな相違が生じてくる。沖縄におけるベッテルハイム(B. J. Bettelheim, 1811-1870)に関する評価は高く、数回にわたってキリスト教会、医学会、官公庁を含めて、公の記念式典が持たれた。

この日本プロテスタント宣教「150年」の年代決定は、その基点を何処に求めるのか。日本のキリスト教界は、日本プロテスタント宣教開始を日米和親条約(神奈川条約、1854年)の翌年から、すなわち日本開国の翌年、租界地に宣教師が居住を許されて礼拝が持たれるようになった日をもって、日本におけるプロテスタント宣教元年と決定したのである。この決定は、あくまでもプロテスタント宣教150周年に焦点を合わせた結果であり、かつての日本のキリスト教界の指導者たちや歴史家たちとの考えから大きくずれている。

日本プロテスタント宣教開始の基点をベッテルハイムまで遡って考えるべきである、というのが沖縄側の主張である。ベッテルハイムの来琉は、1846年5月1日であるから、2009年は、「プロテスタント宣教163年」ということになる。なぜこのような認識の差が出たのか?この「150年」問題は、歴史認識の問題等多岐に亘る問題を抱え込んでいる。

ベッテルハイムは、「英国海軍伝道会」によって、琉球に派遣された。彼は、ハンガリー生まれのユダヤ人で、イタリアの医学の名門パドヴァ大学で医学を修めた。中世世界では、この大学とパリ大学、オックスフォード大学が世界の三大大学であったとの名声を博している。ベッテルハイムは多才であったが、特に、語学の天才で13ヶ国語を話せたという。彼を派遣した団体は、英国海軍退役軍人クリフォードによって設立され、主に琉球に宣教師を派遣する伝道団体であった。「英国海軍」という名前がついているので、植民地政策の尖兵であると考えられる人もいたが、英国海軍を退役した軍人の有志によって支えられる任意の伝道団体であった。クリフォードは、かつて沖縄の島民の人間性の品位に心打たれ、感動したが、男性の女性に対する対応は全く感心できない、この点を改善すれば、琉球人は名実ともにすばらしい人種になると確信し、主に男性を教化する目的で、ROOCHEU NAVAL MISSIONを結成して宣教師の人選を始めた。当初は沖縄の医学的な環境の貧弱さを考慮して医療宣教師と伝道に専念する宣教師を派遣する準備をしていた。琉球ミッションは、任意団体でそれほど金を集められず、結局医療と伝道の両方を担当できる人物を探すことになった。そこで、二役でき

るベッテルハイムが選ばれた。彼は医療と福音伝道という二つの職責を負って、妻と3人の子どもたちと家庭教師や何人かの必要な人材を伴って旅立った。彼は香港経由で琉球の沖縄島に派遣されることになった。旅の途中で女の子が生まれたが、彼が未だ見ぬ琉球に思いを馳せて、Roochooと命名した。ベッテルハイム一行は、官憲の厳しい監視下で8年余、艱難辛苦を舐めながら懸命に働いた。

彼は宣教師魂を強く持っていた強い人物であったことが窺える。ベッテルハイムは、香港滞在中に琉球伝道の青写真を作成して、それに従って、次の四点に絞って計画実行した。

1. 福音伝道
2. 医療活動
3. 聖書翻訳ルカ、ヨハネ、使徒行伝、ローマ書)
4. 西欧科学を取り入れた教育機関の設置

残念ながら、4は実現できなかった。これが実現していれば、沖縄は日本において最先端を行く科学教育がなされ、東アジアで最も先進的な地域になっていたであろうと推測される。当時は鎖国政策が採られていた時代で、薩摩は幕府に忠誠心を示すため、キリシタン取締りには厳格であった。このため、ベッテルハイムの宣教活動は古代の地中海世界における福音宣教と同じような苦難の道を歩まざるを得なかった。パウロのような宣教師スピリットが強く持っていないと、この任に堪えることはできないであろう。

ベッテルハイムの琉球における活動は割愛して、話を先に進めるが、沖縄関係者以外の人には、あまり評価できない人物と働きであったかも知れないが、ベッテルハイムの働きは、琉球人の心の中に深く残っており、その後、ベッテルハイムを尊敬している団体や個人が彼を覚えて様々行事を行ってきたが、4点程紹介しておきたい。

- 1.1939年に「ベッテルハイム博士来琉90年祭」が挙行された。この時、愛孫のプラット夫人が参列したということである。この式典に教会関係者、県医師会関係者も加わっている。
- 2.1954年9月1日、「ベッテルハイム博士離沖100年祭」が各界の協力によって開催された。
- 3.1966年5月、「ベッテルハイム来琉120年記念式典」行事が沖縄キリスト教協議会、県医師会、宣教師会の共催で行われた。
- 4.1996年、全沖縄キリスト教会、日本聖書協会共催で、「ベッテルハイム来琉150年記念聖書展」が開催された。琉球語への翻訳聖書が展示され、紹介された。

以上のように、ベッテルハイムの働きは、キリスト者である、なしに係わらず沖縄のために精神誠意尽くしてくれた人物の業績は、住民サイドに強い印象を与え、今尚、人々の心に残っている。特に、ベッテルハイムから教えを受けた医師たちの子孫は、那覇市をはじめ宮古島にも健在で、現在も医療に従事しておられる。

もう一点の疑問は、ベッテルハイムが派遣団体の母体である教会とその関連教会から全く無視されていることである。幾つかの理由が挙げられるが、琉球赴任前になされた聖職者任職の按手礼執行の約束が果たされなかったことは、何を意味するのか。彼は正式に教会によって派遣された聖職者ではないという理解がなされていて、彼の働きが教会の業

であるとは認められない、という立場である。せいぜいプロテスタント伝道の先触れであるとしても、教会の業ではないので正式に日本プロテスタント伝道の最初の宣教師とは認め難いという立場であろう。このような考えは、プロテスタントからすると宣教論に関する重大な問題が潜んでいる、と云わざるを得ない。

英国国教会当局から全権を委任された香港主教が、ベッテルハイムを問安するために那覇を訪れた。その時、主教が受けたベッテルハイムに対する印象は頗る悪く、それが按手札を執行されなかった理由になったのかも知れない。琉球王府の下級役人たちが、ベッテルハイムの行く先々につきまとい、何かにつけて嫌がらせや妨害されたのではたまったものではない。時には、群集から石を投げられたこともあった。そのほかに人種問題や学閥の問題があったことが考えられる。

その問題に若干触れてみたい。ある人は、ベッテルハイムがヨーロッパの大学ではなく、オックスフォードがケンブリッジを出ていれば問題はなかったのではないか、という説もある。しかし、パドヴァ大学は、ヨーロッパでも名門医学部であったが、恐らく聖職者になるためにはオックスフォード大学出身でなければならなかったという人もいる。しかし、聖職者養成は、大学よりも教会で養成するのが一種の慣わしであった。当時の神学部は、牧師養成を任務とする学部でなく、研究者・神学者養成の色彩が濃厚であった。もう一つの可能性は、彼がグダヤ人であったからではないのか、という疑問を呈する者もいる。ヨーロッパのアンティ・セミティズムから来ているのではないか、という意見である。何れにしても、ベッテルハイムが粗野である、という香港主教の判断が正しかったのか、当時、彼を監視していた役人の情報からなのか、判然としない。今後、もっと実証的な研究が必要であろう。

最後に、琉球大学名誉教授照屋善彦氏の『英宣教医・ベッテルハイム・琉球伝道の九年間』は、米国でPh.D.の学位論文として執筆され、邦訳されている。包括的なベッテルハイム理解のためには欠かせない優れた研究書である。「150年」問題以来、照屋教授は、沖縄のみならず東京でも優れた講演をされた。県立芸大のジェンキンス教授もライフ・ワークとして地道にベッテルハイム関連の資料を探し出して、研究を継続しておられる。

2009年2月8日、聖公会沖縄教区ベッテルハイムホールを始めとして、沖縄キリスト教学院でも3回にわたるシンポジウムが開催された。その実として、『ベッテルハイムと琉球伝道(日本プロテスタント宣教150年問題を問う-)』(講演会・シンポジウム)が印刷物として出版され、購入して読むことができる。沖縄のプロテスタント諸教会のベッテルハイムに対する評価が一致していることを付け加えておきたい。

※本学所蔵の『琉球宣教師ベッテルハイム書簡』は1846年から1854年の間に那覇で伝道をした日本で最初のプロテスタント宣教師であり医師でもあるパーナード・ジャン・ベッテルハイム(伯徳令, Bernard Jean Bettelheim 1811-1870)が外部に宛てた手紙である。



学<sup>くら</sup>びて思<sup>おも</sup>わざれば則ち<sup>すなわ</sup>ち<sup>くら</sup>閑し、  
思<sup>おも</sup>いて学<sup>まな</sup>ばざれば則ち<sup>すなわ</sup>ち<sup>あや</sup>殆<sup>すなわ</sup>うし

教学部長兼学習支援センター長

武村朝吉

人類はその最も偉大な発明であるといわれる文字を手にしたことで、大量の知識を後世へ伝えることが可能となり、飛躍的な進化を遂げることになった。図書館には自国のものは言うに及ばず、諸外国あるいは歴史上のものまで、古今東西の先哲たちの思索活動のエキスを納めた膨大な書籍が所蔵されている。もし私たちが多くの時間を図書館で過ごし、書籍を紐解くことを喜びとするならば、どんなにか知識が豊かになることだろう。

しかし、残念ながら私たちの脳は省エネ志向で、どうも読書とか勉強とかを避けようとする習性があるらしい。読書も勉強もどちらかという難儀な作業というイメージが強いようだ。昨今注目されている機能脳科学でも「やりたい」と思っ<sup>て</sup>やることの重要性が強調されているが、「好きこそ物の上手なれ」という古くからある格言に通じる。逆にいうと、勉強も読書も好きでなければ上達しないということになってしまうが、おもしろいことに中国語では「勉強」は「強要する」を意味し、私たちを勉強から遠ざけてしまう原因を言い当てているようだ。

さて、どのようにしたら勉強や読書が好きになれるかと考えてみると、その難題に対する答えを模索する上で参考になりそうなもの一つとして、『論語』の「學而不思則<sup>くら</sup>閑、思而不學則<sup>あや</sup>殆<sup>すなわ</sup>」(学<sup>まな</sup>びて思<sup>おも</sup>わざれば則ち<sup>すなわ</sup>ち<sup>くら</sup>閑し。思<sup>おも</sup>いて学<sup>まな</sup>ばざれば則ち<sup>すなわ</sup>ち<sup>あや</sup>殆<sup>すなわ</sup>うし。)」という一節があるように思う。元々それは学問の姿勢を戒めたものであるが、読み返すたびにその奥深さには驚嘆させられるものがある。孔子があたかも、現代科学の中で定説となっている計り知れない人間の頭脳の可能性を想定していたかのように響いてくるのである。アインシュタインでさえも3%しか使わなかったといわれる人間の頭脳、その小宇宙にも似た未知なる世界の可能性を如何に開拓してゆくか、そのプロセスを説いているように感じさせられる。

勉強も読書も嫌いだった私は、大学院生になって「考える」ことにのめり込み、気がついたら勉強も読書も大好きになっていた。その激変ぶりには我ながら大いにびっくりしたが、どうやら、その理由は論語のその一節で説明がつきそうである。学ぶことと思考することは、相互補完の関係に加えて、強い相乗効果を生むようである。学ぶことで未知なる世界に踏み込み、思い、未知なる世界を開拓し慣れ親しむ。その繰り返しで、嘗て使われなかった頭脳の未知なる領域が徐々に開拓され、より多くを思い、その結果として、より多くを求めようになる。それが好きという状態に他ならない。

図書館に収蔵されている書籍に慣れ親しんだとき、私たちの知性は鍛えられ、私たちの頭脳によって認識される森羅万象としての小宇宙は成長を続けて、いつしか客観的な大宇宙に近づいてゆく。図書館は私たちを宇宙へと誘う空間であるともいえる。



## 図書館の思い出

沖縄キリスト教学院大学人文学部  
英語コミュニケーション学科

准教授 新垣友子

キリ短の図書館に初めて足を踏み入れたのは、高校3年生の受験の時だった。ずいぶん前のことなのでおぼろげな記憶ではあるが、英語の面接会場であった首里キャンパスの図書館にドキドキしながら向い、故グレイ先生に面接してもらったのを覚えている。入学してからは毎日山積みの課題に追われ、足繁く図書館に通うことになるが、高校の図書館とは違い英語の本が並んでいるのを見て、「あんな本がいつかはスラスラ読めるようになるのかなあ」と憧れたものである。

西原キャンパスに移転して現在の図書館を見たときは、まさに驚きと感動であった。何もかもが新しく広くてキレイで、ずっと図書館にいたい気持ちになった。実際、2年次後期もやっぱり課題やレポートに追われる日々だったので、好むと好まざると図書館に入りびたりであった。電子辞書がなかった当時、英和辞典と和英辞典を持ち歩かなければならなかったが、図書館からの本をさらに詰め込んだカバンがずっしり重く修行のような日々であった。

卒業後、桜美林大学に編入したが、キリ短時代ほど課題もなく、図書館から離れた2年間で、むしろ東京の大きな書店に魅力され書店で立ち読みを楽しんでいた。その後進学した獨協大学では、ほぼ毎日図書館に通った。大学院生は書庫まで入ることができたため、書庫の薄暗い場所で長時間文献を探したり、学術雑誌からの論文をコピーしたりよく利用したが、持ち帰って研究室が自宅で読んでいたため図書館はもっぱら資料収集の場所であった。

1998年に英国スコットランドのエディンバラ大学に留学したのだが、そこでの図書館は全くの別世界であった。大きな大学だったため、大学所属の図書館が本館を含んで15か所。学部によってキャンパスが分かれているので、そのキャンパスごとに専門の図書館があるといった感じだ。私の専門である言語学は本館に所蔵されていたため、ほとんどそこで用が足りた。本館の規模も半端じゃない。ワンフロアがとても広いうえに6階建てで何度も迷った。本には貸出し用にshort loanとstandard loanと2種類あり、前者が1週間、後者が4週間(院生や教職員は3か月)で、よく使用される図書はみんなが使えるように配慮されていた。

2008年に海外研究の機会があり再度訪れた時は、当

時とはずいぶん違っていた。無線LANが整い、自分のパソコンを持ち込んで作業することができた。ちなみに、大学院生にはMacのラップトップが無償で配られる。研究を終えた卒業時に返せばいいというシステムだ。電子ジャーナルやデータベースも豊富になり実際に本を持ち歩くより検索して電子データとして入手し利用することが多くなった。また、図書の延滞には罰金が生じ、本の種類に応じて1日延滞につき40円から200円、最長延滞で5千円近くの罰金を支払わねばならないため、学生たちは常に返却日を気にして本を管理していた。大学のホームページから図書館にアクセスして、学生番号とパスワードを入力すれば自分で借りた本の返却日が表示されるので便利だった。

本館の開館時間は、カウンターは午後8時頃に閉まるが、平日は7時半から深夜2時半まで開館している。深夜2時半に本館が閉まったとしても、大学のキャンパス内に24時間の勉強スペースが確保されているため、学生たちはそこに移動して勉強を継続することができた。私は、深夜の利用はほとんどしなかったが、図書館には頻繁に通っていた。指導教官との面談が終わると図書館に直行し、指導された点をまとめたり色々調べたりするのが習慣だった。図書館は緑いっぱいの広々とした公園に隣接しており、きれいな景色に癒されながら勉強した留学時代だった。

私にとって図書館とは、分からないことだらけで奮闘していた自分の辛い時期を共有してくれた仲間であり、たくさんの情報を提供してくれる最高の協力者である。学生の皆さんにとってもそのような場所になってほしいと願っている。

..... 図書委員からの一言 .....



時は流れて

沖縄キリスト教学院大学人文学部  
英語コミュニケーション学科

教授 高崎 正名

私の小学生時代は“冒険小説”“偉人伝”“歴史物語”、何でも良かった。とにかく本が読みたかった。しかし、当時の私にとって、本は簡単に買ってもらえぬ大変高価な品物であった。友人と貸し借りしても、近所の貸本屋さんを利用しても十分満足のいく解決とはならない。

「そんなに本が読みたいなら、市の図書館に行けば。」と母親が私に知恵を授けてくれた。

「小学生の子供であっても、読ませてくれるかな。」と恐る恐る出かけて行った図書館は、なんと宝の山。日本語に訳された外国の本までが読んでも読み切れないほど用意されていた。その日から毎日のように1時間近い道のりを歩いて通った。「おなかがすいたら食べなさい。」と母親がポケットに押し込んでくれたコッペパンの味も懐かしい。

大学生時代、卒論作成に取り組み始めて愕然とした。講義ノートや教科書だけではとても間に合いそうもない。インターネットという便利なツールもない。そこで、困った時の図書館頼みとばかりに図書館通いを再開した。

大学の図書館は蔵書数を誇るだけでなく、研究テーマに必要な書籍、研究論文が揃っていた。しかも秩序正しく整理されており効率的に学ぶことができた。

時は流れて今の私は、本学図書館の「特別コレクションコーナー」に強く惹かれている。「石田譲一鉄道図書コレクション」、「宗教改革者全集—カルバン著作集」全59巻コレクション、ダリ画「ウルガタ聖書全5巻」(特別限定版199部の109番)、「手塚治虫漫画全集」、「仲里朝章文庫」など、他の図書館では得難い貴重な資料が閲覧できる。

この場所に来ると、これまでの自分の研究視野は狭かったのではないかといつも考えさせられる。そして、もっと幅広くもっと深掘を、とエールが聞こえてくる。

..... 学生からのメッセージ .....



私の図書館利用

英語科 2年次 伊豆味 樹

私は初めて本学の図書館を利用した際、館内に入ってすぐ目に止まる綺麗にディスプレイされたたくさんの雑誌や、本学に開設された短大と四大のそれぞれの学科に特化した本の多さ、それまで身近に利用した経験があった小・中・高のどの学校よりも多岐に渡るジャンルの本があることに惹きつけられ、図書館を利用することが更に楽しみになったことを覚えています。

その中でも特に、資格取得や就職に関する本の多さに驚かされたことが強く印象に残っています。実際に、本学の図書館で私が多く利用したのは資格取得に関連するコーナーで、特に TOEIC の得点 UP や英検合格のために必要な勉強をすることが目的でした。それまでの私は、資格取得に対する意欲はあまりある方ではなく、むしろ資格は必要になった時に取れば良いと資格取得の時期や準備すらも後回しにしている状態でした。しかし本棚に並ぶたくさんの資格に関する本やそれらを使って館内で勉強をしている方々を目の前にして、「こんなに素敵な環境が整っているのだから有効利用しなくては」と図書館を上手に活用して在学中に資格取得を目指す目標ができると同時に、その目標に向けての努力をする意志も生まれました。そして私にとって、本棚に並んだ様々な本を比較しながら自分に合ったものを見つけ、その本を何度も手にすることが可能なこと、本を借りなくても少しの空き時間に気軽に手に取り単語を眺めたりできる環境が整っている所がとても便利で、いつしか図書館が足を運ばば運ぶほど資格取得に繋がる存在となりました。

図書館はその人の置かれた状況や目的の違いによっても色々な利用の仕方ができる魅力的な場所だと思います。私はこの図書館利用の体験を通して、まだまだ知らない発見や自分の新たな目標を定めるきっかけを生む場としてこれからも身近に図書館を利用していきたいと思います。

## ..... 学生からのメッセージ .....



### 図書館奨学生をつうじて

保育科 1年次 松川 綾

私は図書館奨学生として2012年4月から図書館で奉仕させていただいています。私が奉仕を通じて感じた事は、責任の重さです。利用者のために本を装備したり、見たい本がすぐ見つかるよう、分類番号順にきちんと並べ、本を探しやすいように常に整理をしています。カウンター業務では本の貸出・返却をおもにしている、そこでは色々な人との出会いがあります。同じ学科で同じ学年で一度も話した事がない人と本を通して話をしたり、違う学部の人と話す事が出来たりと、本との出逢いだけではなく、人との出逢いも多いです。また、図書館を利用する人は在学生だけではなく、地元住民の方はもちろん県内各地からも来館され、とくに卒業生の保育士がよく大型絵本や紙芝居を借りに来ており、誰にでも利用しやすくなっています。新聞も普段読んでいる沖縄タイムスや琉球新報だけではなく、経済や福祉、キリスト教、海外の新聞などと幅広く揃えています。過去一年分の新聞も保管していて、授業や課題をこなすのにすごく便利です。また多読の本も、シリーズ別に並べたり、レベルを本に書き込んであったりと、工夫をしています。

一度も図書館を利用した事がない人は一度足を運んでみてください。そして、わからないことが、あれば気軽に声をかけてください。全力でお手伝いします。



### 多読を通して

英語コミュニケーション学科 1年次 平田 真璃子

図書館の二階には子供向けの英語の本がたくさん置いてあります。本はレベル別に分けられていて40字程度の非常に簡単なものから、6000字あまりの難しいものまでとても幅広いです。私たちは週に一回このコーナーから本を借りて読む「多読」の授業があります。入学当初、私は絵本を読むだけで読解力や読むスピードがあがるとは全く思っていませんでした。一番最初の授業で、シャーロックホームズの短編を読んで問題に答える、というテストがありましたが、私は時間内に読むことができず、質問にも半分ほどしか正解できませんでした。そして半年間多読を続けた結果、学期末のテストでは本を時間内に読むことができ、さらに全問正解もできたのです。知らないうちに自然と読むスピードや内容を把握する力がついたのだと実感するとともに、多読にはこんな力があるのだと驚きました。子供向けだからと言って簡単な単語ばかりではありません。教科書に載っていないような擬音語や生き物の名前などの単語が出てくることもあって、より英語を身近に感じ、学ぶことができます。また、本を通して英語圏の文化や生活を垣間見ることができるのも「多読」の良さだと思います。

Please come to library and enjoy reading books!

You'll be a good student, I promise.



### 乱読する

異文化コミュニケーション学研究科 2年次 伊芸 靖弘

大学に入学して、私は頻りに図書館に行って本を借りるということがなかったのですが、図書館でのアルバイトや卒論をきっかけに本を借りて読む機会がとても増え、本が与えてくれる力と楽しさを本から学びました。辛い時に勇気や感動を与えてくれたり、勉強や人生で迷った時や困難に直面したときは知識や経験を教えてくれるのです。本の楽しさは、音楽を聴いたときの心地よさ、映画を観たときの感動、そしてマンガを読んだ時の面白さなどの感覚と同じだと思います。

しかし、「本の良さ」をいくら説明したとしても、その感覚は分かりにくいでしょう。地動説のガリレオが「他人に何かを教えることなんてできない。できるのは、自力で発見することを助けることのみだ」というように、自分自身で音楽を聴いたり映画を観たりしないと、その良さは分からないのと同じなのではないかと感じます。

本に対して愛着がわからない、読む気になれないとしたらオススメは乱読です。適当に歩いて気になるものを取って、つまらないと感じたらすぐ次の本を探すといい。それでも自分の読みたい本が見つからなければ、わざと興味のない本を選んだりして図書館の中を気ままに散策するのも手だと思います。するといつかは自分の人生を変える運命の本に出会えるかもしれませんし、自然と図書館に足が向いているかもしれません。

最後になりますが、私にとって本を読むということは「感覚の共有と確認」をする、そして図書館は知識、情報や経験を提供してくれるだけでなく、自身をユーモラスにしてくれる可能性に満ち溢れた魅力的な場所だと思います。学生のうちは本を読む機会に恵まれているので、図書館を最大限に活用してもらいたいです。

● 著作活動 ●

(2012年4月～2013年3月)

- 青野 和彦** ①学会発表要旨  
「ラス・カサスのベネズエラ植民計画の理念—二つの『覚書』における「共同体」(comunidad)の目標の検討を通して—」、『キリスト教史学』第66集、キリスト教史学会、2012年7月、214～216頁  
②学会発表(単独)  
「ラス・カサスの平和的布教観の形成—ベネズエラ植民計画の挫折からドミニコ会修練期に注目して—」第63回キリスト教史学会大会、2012年9月14日、福岡女学院大学 ※同発表は単著論文『ラス・カサスの平和的布教観の形成—ベネズエラ渡航からドミニコ会修練期までを中心に—』として同学会誌第67集に掲載(査読済、2013年7月)。
- 内間 清晴** ①“Transport properties of  $Y_{1-x}Nd_xCo_2$  compounds” *Journal of Physics: Conference Series 400 (2012) 032107*  
K Uchima, M Takeda, C Zukeran, A Nakamura, N Arakaki, S Komesu, Y Takaesu, M Hedou, T Nakama, K Yagasaki, Y Uwatoko and A T Burkov  
②“Effect of pressure on thermopower of  $EuNi_2Ge_2$ ” *Journal of Physics: Conference Series 400 (2012) 032106*  
A Nakamura, T Nakama, K Uchima, N Arakaki, C Zukeran, S Komesu, M Takeda, Y Takaesu, D Nakamura, M Hedou, K Yagasaki, and Y Uwatoko  
③“Pressure effect on transport properties of  $NdCo_2$ ” *Journal of Physics: Conference Series 391 (2012) 012110*  
K Uchima, M Takeda, Y Takaesu, H G Flesch, M Hedou, T Nakama, K Yagasaki, Y Uwatoko and A T Burkov  
④“Pressure and Substitution Effects on Transport and Magnetic Properties” *Journal of the Physical Society of Japan 82(2013)014708 of  $Y_{1-x}R_xCo_2$  Systems with Static Magnetic Disorder*  
Masataka Takeda, Atsushi Teruya, Shintaro Watanabe, Sentaro Hirakawa, Yuichi Hiranaka, Ai Nakamura, Yoshinao Takaesu, Kiyoharu Uchima, Masato Hedou, Takao Nakama, Katsuma Yagasaki, Kazuyuki Matsubayashi, Yoshiya Uwatoko, and Alexander T. Burkov
- 伊佐 雅子** ①用語解説『異文化コミュニケーション事典』  
(編集:石井敏・久米昭元)(2013年1月) 春風社 650ページ。7980円  
②研究論文  
伊佐雅子と宮城恵子の共著  
「患者の視点からみた医療不信とコミュニケーション」  
『九州コミュニケーション研究』(第10号)(2013年2月発行)日本コミュニケーション学会九州支部
- 大山 伸子** ①学会発表:「沖縄県の幼稚園・小学校における宮良長包音楽の実践と課題」  
日本保育学会(第65回全国大会)東京家政大学 2012.5.4～5
- 山里 恵子** ①国際学会発表(共同)  
「A Comparative Study of Language Policy and Actual English Education between Korea and Japan」  
The 2012 EWC/EWCA International Conference、2012年9月1日～3日、北京大学  
共同発表者:金城正子(本学大学院卒業生《英語教育》、現石田中学校教員<英語>)



おわりに

図書館長 内間清晴



光陰矢の如し、2012年度も終わりに近づいています。この一年間の図書館の歩みを振り返ってみると、4月の新入生を対象とした図書館ツアーに始まり、クリスマス絵本展、ハワイ研修関連図書展示、こんな本読んだ推薦図書展を行いました。今年で3年目となる「図書館主催講演会」には、内村千尋さんをお招きし「瀬長亀次郎と沖縄の人々-那覇市長時代の父・亀次郎を語る-」という題で講演していただきました。講演会開催前には瀬長亀次郎氏の未発表の原稿が見つかったという記事が地元の新聞2誌に掲載されたことで、とてもタイムリーな講演会となりました。同時に図書館では瀬長氏にまつわるパネル展を行い、学内外から多くの方々が足を運んでくださいました。

図書館の役割としては教職員や学生の教育・研究のサポートだけではなく、地域住民の方々に開かれて、また、様々な情報発信ができる図書館でありたいと考えています。昨年設置した「英語多読図書」、「新着絵本」そして「資格キャリア関連」の3コーナーの書籍を充実させた効果もあり来館する学生が増加し前年度比の約160%の貸出冊数となりました。中長期的なビジョンになりますが、学生達が気軽に来館し、ディスカッションできるような談話室や個人学習ブースも設置していきたいと考えています。本学院の建学の精神はキリストの教えが礎となっています。建学の精神であるキリスト教に特化した図書館でありたいという思いから、図書館1階にあったAVルームを貴重書コーナーとしてリニューアルし、初代学長であられた仲里朝章先生の手記等を集めた「仲里朝章文庫」やキリスト教関連の稀覯書をまとめて展示することを計画しています。

図書館の業務は外からは見えにくいものも含め多岐に渡り、それゆえに試行錯誤な毎日ではありますが、教育・研究の根幹であること、建学の精神がキリスト教であることを常に覚え歩んでいきたいと考えています。

# 2012年度 主な図書館関係行事

## ★ 図書館主催講演会開催・パネル展示

沖縄キリスト教学院図書館主催講演会『瀬長亀次郎と沖縄の人々 - 那覇市長時代の父・亀次郎を語る -』(沖縄キリスト教平和研究所共催)が開催され、学内外より48名の参加がありました。講演会に際し、写真パネルや関連資料を図書館ロビーに展示しました。

講演日時：2012年5月26日(土) 14:00～16:00

演題：「瀬長亀次郎と沖縄の人々 - 那覇市長時代の父・亀次郎を語る -」

講師：内村千尋氏

場所：本学 SHALOM 会館 1-1 教室

パネル展示期間：2012年5月24日(木)～31日(木)



講師・内村千尋氏(左)と内間図書館長(右) ▶

## ★ 図書館ツアー実施

2012年4月5日(木)～4月17日(火)、新入生全員を対象とした『図書館ツアー』を計11回実施。図書館利用方法や資料の探し方、データベースの使用方法等について説明しました。

## ★ クリスマス絵本展

2012年11月13日(火)～12月22日(土)、クリスマス絵本展を開催しました。



## ★ ハワイ研修関連図書展示

2012年11月30日(金)～2013年2月末、ハワイ研修関連図書を展示しました。

## ★ 『こんな本読んだ』推薦図書展

冊子『こんな本読んだ』を図書館で編集発行。2013年1月15日(火)～1月31日(木)にわたり、学生・教職員(27名)が推薦した図書(36冊)を図書館ロビーで紹介しました。



# ★ 図書館NEWS!

## コレクション紹介

2012年度文部科学省の私立大学等研究設備整備費等補助金で「琉球布教を中心としたキリスト教関連重要文献コレクション 全6点」を購入しました。

「琉球宣教師ベッテルハイムの書簡」  
1850年 広東刊 ▶



## 図書館利用状況

本年度12月末現在までの合計貸出冊数(14,038冊)が、前年度同時期の貸出冊数(8,737冊)と比べ、大幅に増加しました。(前年度比 約 161%)今後とも図書館の充実を図っていきます。



\*英語多読図書コーナー\*



\*絵本コーナー\*



\*キャリア(就職・資格)関連図書コーナー\*

σοφός (ギリシャ語)『ソフォス』の語源:ソフィアと同語幹に属する「熟練した、賢い、学問に熟達した、教養のある」等の意味。